

能登への研究旅行： 学習、ボランティア、地域社会への参加の旅

2025年3月7日から9日までの3日間、オリ・ゼミの学生9名が、オリ・アケミ教授の引率のもと、金沢県の能登を訪問した。中国、アゼルバイジャン、ケニア、ドイツ、ジンバブエという多様な国々を代表する学生たちは、廃棄物管理、コミュニティ参加、そして能登を襲った壊滅的な地震後の災害復興に焦点を当てたユニークなプログラムに参加した。

この旅は、大学の寛大な資金提供による新幹線の旅から始まった。金沢駅に到着後、一行は能登臨時廃棄物処理場を訪れ、地元の職員から廃棄物の分別プロセスについて説明を受けた。震災後の復興に欠かせないこのシステムは、リサイクル品、土砂の分別、ゴミの分別、可燃物、壊れた瓦、コンクリート片、被災した構造物から出る木くずという一方通行のルートに従っている。現在、およそ200~300世帯が解体を終えており、2025年10月までに4,000世帯が解体される予定だ。発生した廃棄物の累積量は、2ヶ月間の解体作業による生産量に匹敵する。廃棄物管理におけるこの漸進的な進歩は、指定された期間内に想定される持続可能性の目標を達成するための具体的な一歩を意味する。

特筆すべきは、この現場で働いている従業員の多くが定年退職者であり、地域社会の回復力と集団的努力を示していることである。

その後、一行は能登町役場を訪れ、職員が地震が地域に与えた影響、特に環境問題や廃棄物管理に関する見識を共有した。このセッションでは、地域社会が直面している課題と、地域の再建と復興のために実施されている革新的な解決策が強調された。

生徒たちは2日目に能登ボランティアセンターでボランティア活動を行い、ゴミの分別作業に積極的に参加した。ヘルメットと手袋を装備した一行は、コンクリート、木材、プラスチック、割れた瓦、紙類を分類する作業に熱心に取り組んだ。天ぷらや新鮮な魚介類などの伝統料理を楽しんだ後、温泉でリラックスした。途中、一行は絶景スポットに立ち寄り、息をのむような能登の海の景色や自然の美しさを堪能した。

最終日は旅のハイライトで、生徒たちは地元の人たちと一緒に料理を作り、交流する機会を得た。これは豊かな料理と社会的な試みであっただけでなく、最小限の資源で料理を作るという貴重なレッスンでもあった。この日は、青森県八戸市出身の著名な食育家、防災料理研究家、料理講師である渚直子サンが出席した。直子さんは、わか

りやすく親しみやすい料理を得意とするシェフとして全国を飛び回っており、生徒や地域住民に彼女の専門知識を学ぶ貴重な機会を提供している。この実地体験のおかげで、一行は地域住民と絆を深め、一緒にさまざまな料理を作りながら笑いや話を共有した。地震からまだ立ち直っていない地元の人々にとって、この交流は困難な時期に喜びとつながりの感覚をもたらした。

この旅を通して、生徒たちは災害復興、廃棄物管理、コミュニティの回復力の重要性について貴重な洞察を得た。地元の人々はこの訪問に深い感謝の意を表し、学生たちはこの地域の課題と人々の強さについて深い理解を得た。

この調査旅行は、学術的な努力だけでなく、文化交流と連帯という心のこもった体験でもあった。オリ・ゼミのクラスは、この忘れられない旅を可能にしたオリ・アケミ教授、大学、そして能登の人々に感謝の意を表します。